

発達障害の理解と支援

－発達障害のある子ども達への心理的支援の方法－ (学校現場での支援の実践を通して)

講師：大阪樟蔭女子大学
橋本 秀美

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました橋本秀美でございます。どうぞよろしくお願いたします。今年のシンポのとき、深夜台風襲来の翌日が講演で、私も小学生と同じような気持ちで明日はなくなるのかなとか思いながら、講演は出来たんですけど、交通機関が止まっておられる方を除いてはみなさん、そんな天候のなか来ていただいてとても感動したことがあります。また追手門の皆さんとお会いすることになり、段取りをしていただきました大学の皆さんに感謝いたします。

最初パソコンが映らないでドギマギしまして、本当に人生って何があるかわからないということをいつも感じながら、日々暮らしている状況ですので、心を静めて始めたいと思いますので、よろしくお願いたします。

今回のテーマは「発達障害の理解と支援」ということで、「発達障害のある子ども達への心理的支援の方法（学校現場での支援の実践を通して）」というサブタイトルをつけさせていただきます。受講していただきます皆さんのご職業、年齢など、ある程度わかる範囲でお聞きしました。学校現場も校種も、幼小中高、特別支援、ほとんどにわたると思います。それから支援の現場、福祉や医療や教育の支援の現場で実践して下さっている方々、保護者の方々だったり、とても広い範囲にわたって今日は来て下さっていることがわかりましたので、お話をどこに焦点をあてようかなってということで、一応このような

段取りを考えています。一応前半は「発達障害とは」という、少し入門編というかわかりやすいところからお話をさせていただいて、後半は現場との、少し専門的な話をさせていただいて、その後事例を紹介させていただけたらなあと思っています。お手元に資料を何日か前にお送りしています。受講して下さる方々も今申し上げましたように幅広く来て下さっていますので、すこし内容がかわったりするところがあるかもしれませんが、どうぞお許してください。前置きが長くなりましたが話を始めていきたいと思います。

発達障害とか特別支援教育とか、子どもさんがどこで教育の場をもつのが一番適切なのかというのを適正就学というんですが、教育委員会のそういうふうになづけられた事柄の、私自身の考えていることや皆さんと考えたいこと、後は個別支援だったりさらに細分化して、今日のテーマ、欲張ってこれだけ挙げてるんですが、今申し上げましたようにどの辺まで話ができるか。ですが、まず「発達障害の理解と支援」というテーマに沿って特別支援教育、これを簡単に少しお話をしたうえで、ADHD、PDD、少し専門的に大学院生の方であるとか専門家の皆さんにはもう何度も聞かれてるお話だと思いますが、診断基準としてDSM（アメリカの精神医学会の診断基準）、V（ファイブ）が去年出まして、今日本で翻訳中です。PDD（広汎性発達障害）と聞いていたんですけど、これが自閉症

スペクトラムという具合に、ほとんど同じことを指しているんですが、名称が少し変わってくると思います。それから最近ワーキングメモリーという言葉が聞かれることがあると思うんですけど、発達障害の子どもさん達とワーキングメモリーというのは非常に関連するところがありますので、少しその辺も触れさせていただいて、あらためて「発達障害とは」ということを、私自身の経験からお話させていただいて、そして学校や家庭、子ども達の対応というところまでお話できたらなあと思っています。

特殊教育から特別支援教育ということに移りまして何が変わったのっていうと、たくさんあるんですけど、一つは対象とする障害の幅が広がって機能部分だけではないいろいろな発達障害という子どもさんが加わったということですね。それから実質ですが、特別支援学校や特別支援学級から幼小中高、すべての学校になったということが、大きく変わった点です。学校の中ではどんなことが行なわれてるのかといいますと、校内委員会というのが設置されたり、特別支援コーディネーターという担当の方が必ず一人いらっしゃいます。ただ学校の中に新しく一つのポジションを作るというのは、財政的な問題も含めて非常に難しいので、例えば特別支援学級の担任等の先生がコーディネーターをされていたり、養護の先生だったりあるいは場合によっては、その他の先生だったりとか、お一人コーディネーターという立場の方がいらっしゃいます。本来はこれが連携の非常に大事な役割で、現場と学校の中の子ども達と家庭と、そして地域とさまざまな専門機関とをつないでいくという役割があります。具体的には、個別の教育支援計画や指導計画を作っていく専門家チームが活動していく。私もこういう形で、専門家チームという形で支援に入っていくということになります。

特別支援教育がスタートして、学校の先生

たちの側にもいろいろとまどいがありました。今10年を超えて少し現場に根付いてきたかなというところですね。例えば最初のころ、今もまだ支援で学校に入っていますと出会うんですけど、担任の先生が「子どもは皆平等だから同じように接しないといけない、だから対象のA君だけ特別扱いすることはできません。30分の1ですよ」って、そのお母さんにお話をされたりということが現実にはあつたりします。そういう課題もあります。

これも必ず一度は通らないといけない部分ですけど、例えばお母さんから担任の先生に、私の子どもの特性、私の子どものことを他のお母さん達に説明したいという具合に申し出られる場合があります。それから担任の先生が、お母さんに他の親御さんに障害のことを説明してほしいと言われたということもあります。じゃあどうすればいいのか。今具体的な話をする時間はないんですけど、ここで大事なことはやっぱりタイミングなんです。ひとつはね。それと、必ず通らないといけないっていったことには一つの意義がありまして、この告知をもしずっと避けているとすれば、そのことを隠すために本人にも知らせないということになります。本人に知らせないということによって、本人が自分を理解して、自分はこういう特性、こういう特徴があるからこういう具合にやっていけばいいんだっていうことを経験したり知っていくという機会を失っていくことにつながります。なので、この告知のタイミング、告知の重要性っていうことが一つあると思います。

それからいろいろな地域、先生、学校、いろんなことにつながります。実際に私たちもずっと長年支援に入っていて、やっぱり学校の中でいじめだとか、いろんな二次的な問題、こういうことがあります。もし今学校の現場の先生方が来てくださっていけば、こういうことも経験されると思うんですね。専門家チームがあることで入ります。でもカウンセ

ラーはそれを知りません、というようなことがあったりします。学校の中でも、連携というのが十分に行われているということが非常に大事ですよ。

特別支援という書き方しましたが、要するにすべての学校で発達障害というか発達の特性をもつ子どもさん達がいろいろな不適應の状況に直面して、理解されず、いじめやからかいを受けて退学して、地元の中学校に転校しても、そのときには対応が非常に問題が難化していて、不登校やひきこもりになっていくっていうケースも見かけます。たとえば、一つだけ例を考えてみたんですけど、どうやって周囲の子ども達にその子のことを理解してもらおうかっていうことを考えたときに、小学生、特に低学年とかの子どもさんだと、今先生方いらっしゃるってくださってるかもしれないけど、例えば先生が体育館で「走るのに遅いA君は頑張っているけどもなかなか早く走れないで苦労しています。いつも走るのに遅いっていつも怒られていたA君にみんなはどうしますか」って言ったら、みんなは「A君を応援します」。先生が「そうだよ。いつも走るのに遅いって怒られて、今日でたないよね」、子ども達が「そう思います」。先生が「じゃあB君が教室からいつも出られなくて、すぐにイライラしてみんなと仲良くできなくていつも怒られていたら、B君どうしますか」、子ども達が「少しずつうまくできるように応援します」、「そうだよ。応援しようね」って、こういうように、低学年っていいですか、年齢が低いほどそういうことがわかりやすく、共感やいろんなものを育てながらそういうことを鍛えていくことがわりとやりやすいんですね。中高になると、この状況に個々の、個別性の状況が加わってくるので、そこでどうするかということ、私たちは、個々のご相談の中でこういう環境、状況であればこういう具合に話をしましょうと、個々に対応を考えていく

ていうことを日頃しています。そういうように特性を持った子どもさんを理解していただくことの、年齢的な問題だったりいろんなことをフォローしながらやっていくってということだと思います。

実際にADHD、PDD、LDの子ども達について困っていることとか支援のポイントということで、はじめはちょっとわかりやすく説明してみたいと思います。

落ち着きのない子、この子、なんで落ち着きがないのかなって考えたときに、環境が主要な場合もありますよね。通常の子どもでも時や場所によって落ち着きがなくなります。それから、心の内面に大きな不安葛藤、要するに心理的ないろいろなものを抱えていてそういう状況が起こってくるということもあります。もう一方ではこの子自身の要因が主要因になる場合もあります。知的な発達の問題、広汎性発達障害、自閉症スペクトラム等の問題、それから多動性障害、脳の気質的な問題というようないろんなことが考えられます。

そこで、あらためてADHDのタイプの子どものさんですね。これは診断がつくかどうかということとはまた後で時間があったらお話しますが、そういうタイプ。仲間の子どもの場合どういう具合に、特に小児のときですね。私たちは実際に、個別のご相談とか支援に関しては、チェックリストを作っていたりして、お母さんにいれていただいたり、先生にいれていただいたりしながら、実態を把握していくということをするんです。日常生活の中でも、「朝すぐに起きられますか」「時間通りに外出の準備ができてますか」「きちんと朝食摂れてますか」「家族間で寛げてますか」というようなことを聞いていってさしあげる。あるいは、保護者の方いらっしゃるってしたら、こういうことを一つ一つ振り返っていただくということですね。「放課後、家庭で学校の出来事を伝えられますか」「学校が終わってから同年代の友達と遊んだりク

ラブ活動に参加できますか」、夕方は「家で宿題できますか」「夕食時に家族と落ち着いて会話ができますか」というようなことを。お父さんの言いつけ、「もう早く寝ましょう」と後ろで怒られてるんですけど、「言いつけ守れますか」「早い時間にすぐ寝ることができますか」「夜中に目覚めることなく熟睡できますか」「同年代の友人と一緒に習い事や行動ができますか」といろいろなことで。生活全般で言えば情緒、周囲に受け入れられて情緒が安定していくと言われていました。周囲と言いつけ争いなく過ごせてる。結局ADHDのタイプの子どもさんは毎日毎日いろんな問題に直面し悩んでいるのです。

自尊心が段々低下していく、劣等感とかトラブル、いろんな反抗的な行動、情緒不安定とかいろんなことが起こっていきます。じゃあ、支援や治療の目標って何なのっていうと、自分の特性を理解し自分の行動をコントロールできるようになること、机上では簡単なんですけど、それを日々どうやっていくかってことに、多分皆さんも、関係の皆さんは取り組んでくださってるということになります。そういうことができるようになると、その子どもたちは生活の困難が改善されて、充実した生活が送れるようになります。

どうしたらいいのかなということ、すこしまたお話したいと思います。1日の流れでいえば家で宿題や兄弟関係、朝の支度、学校の授業、放課後の友達関係、いろんなことです。大事なことは、学校でみられてる問題、これ大事ですね。なぜかという、子どもは、寝てる時間を除けば、おそらく学校で過ごす時間が一番長いんですね。だから学校でみられてる問題、それから学校以外の友達、兄弟、家族との間にみられる問題、全体に目をくばりましょうということ。学校ではすごくきちんとできてるけど、家ではお母さん、困り果ててるタイプの子どもさん、いらっしゃ

いますよね。逆に学校では問題行動というか、ほんとに周囲も先生方も困って、本人がきつと一番困ってるんですけど。ところがお母さん、「家ではほとんど問題ないです」という場合もあるんですね。

これは個々に見ていかないといけないですけど、すくなくとも大まかにわかることは、学校というのはおそらく家よりは構造化されているんですね。いろんなことが時間があって、チャイムが鳴ったら授業が始まり、鳴ったら終わり、何時間目っていうちゃんとした時間の区切りがあって、プログラムがあって、一斉にみんなが行動するとかね。枠の中にはまって、入っていく方が非常にコントロールしやすい状況だったりするタイプの子どもさんは、学校の方が落ち着いてるっていう場合もあるんですね。逆にそういう枠や構造に入ることによって不適応行動がどんどん起こっていく、ここに入りきれない入れない、そういう状況だと、家の方が落ち着いて過ごしているっていうのもあるんですね。学校で枠、構造化があるとその子はうまくいくからといって、家をそういう具合にしてしまったらそれは行き詰まってしまいますね、子どもにとって。だから、どうしていくかを考えていくということになります。

環境調整って一言で言いますと、この子は今、何か食べたいとか、動き回りたいとか遊びたいとかいっぱいわあーっと自分の頭の中回ってるんですね。この子の生活環境からこういう不要な感覚刺激を減らし、集中しやすい空間をつくる。皆さん、きっとここまではおわかりになるんですね。それでどうしらいいかっていうのが、大まかなプログラムだったり大まかな方法だったり、プラス個別にその子に合った方法をやっていくということになります。たとえば家で、同じように机や椅子や本棚をセッティングするとしても、コーナーとかをうまく使って、この子の刺激物をできるだけ取り除くというような環境を

作ったり、学校でも先生の近くに、大抵私たちは特別支援の対象の子どもさんは、前の端の席をとっていただくことが一番多いです。前の席は、先生が一回教室にインフォメーションして、もう一度前で1対1の確認してあげることができますよね。何かあれば、子どもの方からも先生にそういう話ができますよね、そういうことで一番前とか端っこっていうのは真ん中よりも、刺激も少ないし、子どもの方も圧迫感が少なかったり、少し移動を伴うときなんかは、一番クラス全体の邪魔とか刺激にならないということでそういう具合にしています。

いろんな方法がある中のご経験されたり実際に行ってる方もいらっしゃるかもしれませんが、ペアレントトレーニングといって、そういう子どものお母さんたち、保護者の方たちが理解を深めたり、さっき同様家での生活全般にわたって良い生活を、そういう対処法、具体的な対処法を学ぶためのプログラムというのがあります。もしもこういうのに興味があって、どこであるのかなということがあればまた後で…。

そういう具合に適切な支援と治療が必要であり、薬によらない方法。そして、どうしても薬を使わないといけない場合ですね。それはいろいろあります。さっき言いましたような状況が起こったときですね。これは、時間の関係で、もう一度正しく理解することで書いているんですけど、ADHDの定義のところでは、また見ておいてください。

それから、不注意とか多動性、衝動性ってどんなことっていうことですね。不注意、集中力が続かない、気が散りやすい、忘れっぽい。多動性、じっとしていることが苦手な落ち着かない。衝動性、思いついた行動について考える前に実行してしまうということですね。

不注意の特徴ってどんなことっていうので、使ったものを元の場所に置くことを忘れてし

まうので乱雑になるとか、物がどこにあるのかわからなくなって捜し物が増えていく。気をとられやすくやるべきことが後回しになってしまうとか、授業を集中して聞くことができないとかね。集中して聞くことができないので、課題の達成が難しくなるということですね。

多動性の特性についても、授業中歩いてしまったり、関心がとても強くせっかちなため興味を引くものが多いショッピングセンターや遊園地などは、一目散に走り出すなどの危険な行動をとることが多い。実際にこれはよくありますね。以前にも子どもさんが本当に多動で、お母さんが困り果てられてご相談に来られたときは、犬をつなぐハーネスというもので子どもさんをつないでおられて、もう一瞬たりとも目が離せないんですね。お母さん、そんな状態だったんです。それで、いわゆる療育のプログラム、一年生のときからやりまして、その子は一つ一つ改善されてきて、今も高校、大学と落ち着いて過ごせるところまで来てるんですけど、当時、ショッピングセンターなんかで一瞬離すと迷子になってしまうので、その当時はポケットベルっていう、今は携帯でいる場所がわかるらしいのですが、ポケットベルを持ってどこかに行くときにそれが鳴ってるわけですね。本人迷子になって見つかったんですね。本人見つかったんだけど、ショッピングセンターのどこかに落としてきたんですね。そのポケットベルがスーパーの中でずっと鳴ってて、スーパーに問い合わせするんだけど、どこにも見つからないって言うんです。それで2、3日ずっと鳴ってたんだけど、とうとう電池が切れて鳴らなくなって、そのポケットベルは永遠にみつからなかったんです。本人は見つかってよかったねっていうころには、今度駅のホームで、頭をふっと突っ込んだらホームの柵の中に頭が入ったら抜けなくなっちゃったんです。駅中の人みんな引っぱり出そうとしたん

ですけど、抜けなくて、救急車呼んでということに。日常的にいつもこういうことが起こってる多動。この人は多動とか衝動性のところが一番強い方だったんですけど、多動が中核の場合はわりかし小学校の、よく9歳の壁とかありますが、4、5、6年のところで大体落ち着いてくるということがありますが、それだけが症状の人ってわりと少なく、やっぱりいくつかが重なってるということがあるので、この方もそうやって多動、衝動性のところとアスペルガーの特徴と持ち併せていたんです。そういう併せて支援する中で一つ一つ改善されていくってことはよくありますし、日々本人、お母さん、学校、繋がりがら頑張るっていうことになります。

いろいろ人に物を借りたけど忘れちゃうとか、悪気なく言ってしまうって友達に溶け込めないとか、いろんなことがあります。でも、簡単に言うと好ましい行動に注目しましょう。いい面を見ていきましょうということですね。

これは前に聞いていただいた方は、お話聞かれたかもしれませんが、不注意と言えばこれは欠点かもしれませんが、視野を拡げていけるわけですから、それをうまく使う。多動、じっとしてられない。しゃべりすぎる。それもうまく使えばスピーチやスポーツで活かすことができる。衝動でどうしても待つことができない、すぐ行動しちゃう。でもすぐに行動するっていう実行力を活かす。ただその活かすときにその面をどうやってその子が他の力で補っていく、こういう具合にカバーしていく、あるいは周囲がどうやってカバーしていくってことをやりながら、いい面を活かしていくっていうことになります。

これも前にお話したかもわかりません。忘れ物が多い、学校でちゃんと予備を用意しておく。これはね、忘れ物は忘れ物をしたことの罰として罰を与えたとしても改善されないんですね、ほとんどの場合。なぜかという、忘れ物をしたので、授業に参加できなくて、

その授業がさらにわからなくなってしまったというマイナスだけが残っていくからですね。でも忘れ物したときには、それを何らかの形で補う。だけれど、今度忘れないでこようねっていう。今度忘れなかったら、気持ち良い時間が過ごせるんだっていうことを経験していく。そこには単に「はい、忘れたからどうぞ」じゃなくて、その子がどうやってそのことを良い経験の意義を理解していくとか経験していくことに、大人のサポートが必要になるわけです。計算が飛んでしまう子には、ちょっと定規を当ててあげたら飛ばないですね。

特に小学校で忘れ物の多い子どもさんの場合は、お母さんと先生両方にしていただくんですけど。小学生は連絡帳書きますね。さっき言ったように先生の前の端にいますと、先生がもう一度連絡帳を確認してあげることができますよね。忘れ物が多くて治らないんですっていうお母さんのお話をうかがっていると、連絡帳とかにはちゃんと書いてあるんですかという、いや半分ぐらい書いてそのままになっているんですとか、ほとんど書いてないんです。でも前の席で、少しそういうサポートしてあげると、書けるようになります。さらに特性が困難な状況の場合には支援がついて、私たちが支援するというのはすごくあるわけです、そこでサポートしてあげて連絡帳をまず書き終えるというところから始めるわけです。先生にもそれをお願いして。そしたら、今度はお母さんが夜と一緒に、お母さんと準備したから、この子が甘やかされてできなくなるっていうことはないんですね。何故かという段階を踏んでいくので、絶対にそういうことにはならないわけです。

だけど、よくお母さんも学校の先生も思いやりでおっしゃるのが、そんな甘やかしていつまでも手伝ってたら、その子一生できない子になりますよっておっしゃるんですけど、子どもさんにそうやってできる経験、やれる

経験、どうやってやるかっていう工夫とか知恵を一緒に覚えていくことによって、その子は少しずつできるようになるんですね。それをいっつも怒られてたら、怒られたということ、怒られることから逃げたいので隠れまわるとか反抗するとか、そういうことになってしまう。なので、そういう連絡帳の工夫っていうのも一つ一つ意味が、ほんとにささやかなことなんですけど、これを落ち着いて継続してやっていきますと、ほとんど忘れ物は解決されるなっていうのは、ずっと経験しています。

部屋でもね、寝に入ってちょっと刺激の強いものは少し見えないようにするとかね。それからルールの確認ですね。

ルールを確認するときも、大事なものは、必ずお互いに話し合って決めることです。例えば、「あなたはゲームはもう1日1時間ですよ」と。子どもは5～6時間やっているわけですね。「1日1時間ですよ」と。「1時間でやめなかったら取り上げます」「約束2回目破ったら取り上げます」「3回破ったら取り上げます」。結構これ使われてたりするときあるんですけど、例えば本当にこの子がゲーム好きになってしまって、睡眠障害も起こっているような、いろんな不応症症状が起こってくる。こういう状況になっていけば、これでは適切な対応とはいえない、一旦どうするかっていうことはまた別に考えないといけないですけど、まずは重症っていうかそういう状況になるまでに、ルールを話し合っ。ルールを決める時のポイントは、大事なことは、その子ができる範囲のルールを決めるということです。はじめから理想的なこの子ができるわけのないルールを決めてしまうと、必ず破るしかないですね。破ると親や先生は叱るしかないんですね。「よう破ったなあ。偉かったなあ」というわけにはいかないので、破ったということを叱るということになります。そうすると、その人は、やっぱり叱られ

てばかりだから「もういいわ」っていうことに、もっともっと自尊心が低下し、自分が嫌いになっていくっていうことが起こっていくわけです。なので、はじめはこんななまやさしいルールと思うかもしれないけど、私たちはこれを行動療法などの援用にもなりますが、一番できる段階から決めて、そして大事なことは。立てば歩めの親心じゃないんですけど、できると次いきたいんですね、だけれど跳び箱を一段跳んだときに、次は二段っていうんじゃないくて、じゃあ次も一段やってみようね。次は自分で一段、もう手伝わないよ。一段やってみようねって、何回も一段跳べると、そのうちに「二段跳びたいな」って子どもが言うんですね。そういうふうに、できたときにできたものを何回かこんなにできるっていう経験をする。それによって次やってみようっていうチャレンジする勇気が出るんですね。この勇気とか自信が大事なんですね。そして上げていく。そうすると、少しずつ目標に近づいていって、気が付くと目標のところに來るわけですね。それを急いでしまって、3日間取り上げて、子どもは3日の間にもういららするし、ひたすら考えてることは、今度帰ってきたらやるぞ、今度帰ってきたらやるぞ、ということで、そうするとまたルールが守れないということになるんですね。なので、ルールを決めるのも上手にやっていくことが必要になると思います。今言いましたようにいきましょうと。

それから多動だったり声がめちゃくちゃ大きかったりする場合ですね。多動だったらたまに、この答えちょっと前出てきて写してくれるとか、書いてくれるって。そのときに大事なことは、その子ができないようなことを言わないっていうことですね。折角チャンスを作ったのにできないことで、恥をかいたりとかいやな思いをすると、良いことに自分の行動を移していくっていうことを覚えていけないんですね。今やろうとしていること

は、この子の多動性を良い行動、良い動きに移していこうということをやろうとしてるんですね。だから必ずできることをやってもらう、やらしてあげるといことが大事です。

声のボリュームはね、本当に。今心の中でお話ししましょうとかね、それを初めから聞こえない、自分の心の中で話すんだよって。これがボリューム0だよとかね、すぐそばの人はボリューム1だよとかね、こういうのを実際にわかるように体験しつつ段階決めてあげたら、今何かなあで、あっ、5だ、でも今みんな2のときだよとかいってね、まあそういうのがわかるわけですね。

今お話したまとめですけど、家庭、学校環境の環境調整し、場合によっては治療が必要な場合もあります。で、段々いらなくなってくるわけですね。これも今大体いいましたので、お配りした中にもあると思います。見ててください。大事なことは、もともとの問題が環境、成長につれて出てきます、いろんな問題が。継続した関わりが必要です。要するに成長にともなって、また環境の変化にもなって新しい問題とみえることが起こってきたりします。でもこれは、新しい問題というよりはもともとの問題がその環境で生じてくるってことが多いわけです。

次に、自閉症スペクトラムとか発達障害といわれていることについて、少しお話したいと思います。定義について誰でもおわかりと思いますので、少しとばしながら話します。アスペルガー症候群については、自閉症スペクトラムの一つであるということで、自閉症の仲間でもあります。周囲との交流が困難だったり、こういういろいろな特徴ありますけど、知的障害もあります。アスペルガー症候群の子どもさんの場合に特徴として、言語、知能の発達に遅れがないため幼児期には発見されにくい。要するに1歳半検診で何かちょっと指摘がありましたとか、3歳検診で何かありましたとかいうことが少ないんですね。言葉

が早くから出たり、雄弁だったりしますから、わかりにくかったりします。明確な原因や発症のメカニズムが全て今わかっているわけではありません。自閉症と同様に、遺伝的・生物学的要因、免疫学的要因によって、胎内での中枢神経での発育時に何らかの問題が生じ発症するのではないかというぐらいに、今は言われています。症状としては、表れ方、程度は人によって様々です。周囲との交流の困難、社会的に共通する言葉の意味や概念、これが特別な言い回しをしたり、逆に一番わかりやすいのは皮肉とか、そういうものがわかりにくい。比喩もなかなかわかりにくいことがありますね。それでついつい自己中心的な人と誤解されてしまう。ときには、これは自閉症の子どもさんの特徴として多いのが視覚、聴覚、味覚などの感覚に過敏だったり鈍感だったりするということがあったり、行動パターンが変わるとすぐにパニックになっちゃったり、そういうことが起こってくるってことです。

大事なことは、躰とか家庭環境といった後天的な要因によってアスペルガー症候群になるということはありませんということです。私は躰が悪かったかしら、とか、うちの家庭に、環境に問題があったからかしら、ということではありません。

何か気づいたら相談しましょうということですね。

こちらの手立てとしては見てわかるようにという、要するに子どもさんの中には、見る方が優位な子どもさんがおられたり、逆に聴覚が優位の方もおられるんですが、聴覚過敏の子どもさんはたくさんおられます。だから、私たちが今普通に横断歩道に立ってたら聞こえてくる音とは、もう雲泥の差のいろんな音が入ってきて、そういう状況を想像してもらったらわかると思うんです。私の何人か知ってる子どもさんがやっぱりスタジオみたいなところに入っていたかとすごく落ち着

くとか、そういうことがあるようで。

だからスケジュールですね。前もって決めることはすごい大事なんですけど、これが失敗してしまうのは。今もそうですよね。パソコン、何時につけます。今、一応1時15分までにはこの会場に来てパソコンをつないでと、思っていたらパソコンがつかないっていう状況があって、私が今日マイクでお話しようと思っただらマイクが途中で音が聞こなくなるっていう、そういういろんなことって必ずって起こりますよね、予期しないことってね。だからスケジュールを決めるときに大切なのは、こういうスケジュールです。だけれど、もしかしてスケジュールが変わるときは、はじめから予想されるものがあったら、もしかしてって言ってあげたらいいんです。ただ、子どもさんの特性を見ないと、そのことを一度に聞くことによって非常に混乱するタイプの方もいらっしゃいますので、その場合は、もしも変更があってもたいした変更ではない、だけれど必ず先にあなたに伝えるのでねということ。必ず本当に伝えてあげてほしいですね。学校現場ってとっても忙しいので、なかなか一人の子どもさんのために変更を伝えに行けないってことが起こりがちなんです。起こりがちなんで、パーフェクトは無理にしても、やっぱりそのことを伝えてあげるっていうことをしてあげたいです。そういう具合にして、子どもはスケジュールがわかってる。でも、もしかして変更があっても大丈夫っていう経験をしていくんですね。これが大事なんです。もしかしてのときの経験も、良い経験としていく。

スケジュールが変わった途端に、混乱してパニックになって固まっちゃって、もう走り回っちゃって、みんなにそれを見られて、余計に。いろんなことが起こると、どうしてその子が自尊心失っちゃうかということ、周りにそういうのを見られて、そのことの繰り返し非常に自分を卑下しちゃうとか、そう

いうことが起こってきたりしますね。ちゃんとやった通りにしないということで叱られてしまったりすると、この人は立ち直れないぐらいに自分の自尊心を失ってしまうんですね。そういうことでスケジュールを前もって言ってあげる。

しかし、もしもの場合、これは全部そうなんです。例えば発達障害のような特性のある子どもさんが入学式に、幼稚園から小学校入ります。小学校から中学校入ります。そのときに入学式一つしても、入学式のために壇の上で暴れたりとかいろんなことがあって、「先生、この子どもたち、ちょっと見てあげてください」とかって校長先生のところからご依頼があったりすることか多くて。そういう場面で、とっても目立つことになってしまうっていうことが実際あったりするわけです。なので、前もって少しシミュレーション体験させてあげるのがすごく大事なんですけれど、今言ったように、それでも何が起こるかわからないっていう、予期しないことをできるだけ予想、予期してカバーしておくということを、私たちはするんですね。そして、できるだけその子どもさんがマイナスの体験をしない。マイナスの体験をしないということが、とても大切なんです。良い体験をする。良い体験をするのは、こういう場面でこういうことがあったけど、僕は、私はこういったからうまくいったんだ、こういったから良かったんだっていう体験をしていくっていうことにもつながっていくわけです。スケジュールひとつにしてもそういうことがあります。授業にルールっていうのもそうですね。最終的には好きなこと得意なことを活かす。

数々の子どもさんで絵で、外国に行つてすごいっていうか、すごく充実しておられる方だったり、自分で個展を開くようになられる方だったり、いろんなところで発揮しておられる。その子どもさん、自閉症の子どもさんですが、毎日毎日家では、暴れまわっている

し、学校では特別支援学級の中でも混乱してしまう状況だったんですけど、たまたまアートセラピーで、交互色彩分割法活動というのがあるんで、そういうのをしてもらったら、とっても色彩感覚がいいんですね。それで、この子アートを続けながらこういうのを少し時間かけたらどうかなというので、特別支援学校の方で、これもすっごくありがたいことで、たまたまそのことをすごくやらせてくださる先生が長く担任してくださってすごく伸ばして下さって彼は個展を開くくらいにその道に進んだのです。また、縫い物をずっと続けて服を作る仕事ですね、そういうことができる、自立できるような、そういういかれた方とかね。

ただね、大事なことはそんなに人間、好きなことが見つかる人ばかりじゃないし、みつけられる人ばかりじゃないし、得意なことがすぐにわかる人ばかりじゃないですね。だから、じっくりといろいろなことをさせてあげて、いろいろなことをさせてあげるなかで、じっくりと見てあげているということですね。それで何かが見えてきたり、本人が何かに出会ったりするわけです。勿論、もともと電車好きとかいう子どもさんいらっしゃるんで、電車の駅覚えたり鉄道を描くことで地図の勉強になったり、電車の構造が好きだったら理科の勉強になるかもしれないですし、特にロボットづくりにすごく興味を持っていらした方やパソコンのプロになる方などもいらっしゃるんですね。そういういろんなことですね。

ソーシャルトレーニングとか、一般的に先生方に、具体的に探してくださいということと、穏やかに話してくださいということをお願いしています。その子のトーンよりも強い高いトーンで先生が話すと、おそらく聴覚が過敏な方とかは入ってきませんので、それをお願いするようにしています。これは私もできていない、健康的な生活指導、早寝早起き

なども大切ですね。

ワーキングメモリー、プリントに入っていないかもしれません。ワーキングメモリーっていうのをお聞きになったり、知ってますっていう方、手を挙げていただいていいですか。もし現場で、専門機関とかいろんな現場ではおそらくワーキングメモリーのところも扱うようになってますし、これからいろんなところで耳にされたりするということあると思いますので、今少し流行りの言葉っていうことで聞いていただいたら。でもとても大事なところなんですね。

認知心理学のところからいくとどんな定義だとか、脳科学からなども。これ自体が非常に曖昧なものですので、今日は現場で、あるいは家庭で、学校で役に立つということを中心にお話させていただきたいと思います。ワーキングメモリーというのは国語とか算数、理科、こういう学習と密接に関連しています。後はまたちょっと具体的な例をあげてお話しできると思います。

それから発達障害のある子どもさんの多くがワーキングメモリーの問題を抱えていると、今言われています。そして自閉症、ADHDの理解を深め、そういう指導方法の改善、それに役に立つという具合に。今言いましたように非常にいろんな定義があり、いろんなモデルがあるんですが、一応こういう具合にワーキングメモリー、言語的短期記憶、時空間的短期記憶という固まり、これから中央実行系というこの3つがシステムとして働いているという具合に思っていたらいいんですが。言語性、言葉のワーキングメモリーというのは、この言語的短期記憶と中央実行系が関連します。時空間性ワーキングメモリーは、時空間的短期記憶と中央実行系が関連します。今初めて聞く方にとってはなんじゃろなという感じなので、少しだけ。これは今言ったことを説明したけでなのでちょっと進みますね。

じゃあ、実行機能って一体何だろうかということがあります。そういう考える事項、それから行動ですね。こういう制御を行うプロセスであり、脳の前頭葉のどこかが関係してるのかと言われてます。このあたりから少し知っておくと学習指導とか現場で活かせること多いんじゃないかと思うんですけど、実行機能には抑制と更新とシフトの3つの働きがあります。その中で、更新の働きがワーキングメモリと一応考えられて、これは知能に一番影響する部分と言われてています。更新のワーキングメモリのところですね。実際にいろんな議論がある。じゃあ筋肉のように訓練したら強くなるっていう、そういう例えがあったりね、それはどうなんだろうとかね、いろんなことがある。

限られた絵を探したんで、なかなか良いボトルが見つからなかったんですけど、要するにワーキングメモリはボトルのネックのことで、個人によって長期記憶への入口の大きさが違います。この口のものすごく狭いビンに何かを入れていこうとすると、とても口が狭いので、バーってすぐあふれますよね。あふれるのが、ここの口が、衝撃が外にあふれちゃうってビンですね。このちょっと口が広くて貯まるとも大きなこのビンであれば、ツボであれば、ボトルであれば入ってきますね、この口の狭いところより。ちょっとこういう感じに考えてもらったらいいと思うんですけど。

それでこの3つ。もう一度復習しますと、制御というのが目標達成に関わらない、当面関わらない無関連事項を制御します。更新、入力されつつある情報の符号化、モニタリング、そして古くなった情報を課題とより関連する新しい情報に置き換えます。入ってきます情報が、符号化されたり、モニタリング、いろいろな操作をしながら、古くなった情報を課題とより関連する新しい情報に置き換えていく。これがワーキングメモリって

いわれるという具合に、一応と考えたらどうかなということ。あんまり良い絵じゃないんですけど、ワーキングメモリと実行機能、環境を考えていくことで学習を始める前提となる態度、今言いましたね。これ大事なところですね。個人の発達特性に応じた支援やトレーニングが必要です。

シフトっていうのはどういうことかっていうと、この子は今、「あっ、休み時間は終わりだ。次は算数の授業だ」とこれをシフトさすわけです、この中でね。これがヒントです。

そして制御、「気になるなあ、窓の外が。でも窓の外は見ない」と制御するわけです、この子がね。そういうシフトと制御の働きがあって、そしてこの子は学習が非常に、実行機能がうまく働いて、ワーキングメモリ、更新機能が働いて、そして結果が出てくるっていうことですね。

このことをもう一回復習しますと、ワーキングメモリとは、どんなに言うと一番わかりやすいかなと。ワーキングメモリとは、短い時間に心のなかで情報を保持、記憶し、これが記憶ですね、短い時間に心のなかで情報を保持、同時に処理する能力であり、「心の作業場、ワークスペース」とも呼ばれます。要するに心の作業場ですね。この作業するワークスペースですね。作業場と広さであり入口であり、まあそういうことですね。これをワーキングメモリって考えていただくと。集中力がない、集中力がないがために学習に遅れがあることがありますね。これはワーキングメモリが小さいこと関連することもあります。ワーキングメモリの小さい子どもっていう集合体、集合をもし作ったら、そこに発達障害のある子ども、LD、ADHDっていうような子どもさんも入ってくるわけです。この子どもさんたちは大なり小なりワーキングメモリの問題を持ってるわけです。そうすると、学校で学習が困難だったり、集中力が不足したり、課題遂行が

困難だったりする。それは何なのかというと長期記憶への入口が、ボトルのビンの入口がとっても狭くって情報がオーバーフローしちゃうっていう状態なんですね。その状態で、ここで特別支援教育、特別支援が必要になってくるわけです。ただこれは、入口が狭くて情報がオーバーしちゃうので、何もできないんじゃないくて、ちょっと状況が違うんだけど、何を例えにするとわかりやすいかなって思っています。パソコンで中にグチャグチャに入ってるファイルを整理していくの、何ていうんです。たっけ。パソコンの中のファイルが、ファイルの入り方が作業場でグチャグチャに入ってるので、それをズーッと整理してくれるとパソコンのスペースが広がるんですよ。そうそう、デフラグ。そうすると整理されてきて、ズーッとね、そういう作業ですね。だからそういう作業をどうやっていくかみたいなイメージを持ってもらったらいいかなあみたいな。

そういうワーキングメモリーが小さい子どもさんていうのは、指示を忘れたり、複雑な課題をしているときに自分が何をしているのかわからなくなったり、記憶と操作が、記憶しながら操作するという同時になる課題には失敗したり、途中で課題を投げ出しちゃったりとかもあるんですね。さらにダメ押しにもう一回こういう具合に見るとわかりやすいかなっていうのを作ったんですけど、これはさっきと同じ記憶なので、定義なので省きます。

黒板の文字は一旦音声化され、言語的短期記憶に保持され、その間ノートに書き写される。このことを今ちょっと見てみると、ワーキングメモリーが大きい人と小さい人ですね。「ワーキングメモリーとは、短期時間に心の中で情報を保持し」っていうのを黒板に書いたわけですね、先生が。この子が写すわけです。ワーキングメモリーが大きい子どもは「ワーキングメモリーとは、短い時間」ぐら

いまで、この子は記憶を保持して書き写すわけですね、ダーッと。ところがワーキングメモリーの小さい子どもさんは「ワーキング」のところでもう一辺黒板を見るわけです。また「短い」くらいで、また黒板を見る。何度も何度も見てる間に、先生次いっちゃって消しちゃって最後まで書けないとか、こういうことがあったりします。

こういう子どもさんに対してどうしていかってということなんですけど、今日は時間の関係で具体的なプログラムとかそういうものをお知らせするという時間はないんですけど、もし興味のある方があったら個別にお聞きください。

一般的なところまで話しますと、そういう環境を作るためにどうしたらいいか、発達特性を考慮した学ぶための環境ですね。例えば、学ぶ姿勢の確保ということで、1分間集中トレーニングをしてる、やり方とかもあるんですけど、そういう道具の利用ですね。私たちも、多動でズーッと教室の中を、みんなの机の上を誰の手も踏まず本も踏まず跳びまわった後、シューッと外へ出て、虫を探してるか水を撒いてるかっていう子どもさんが、じゃあいきなり45分ずっと一緒にいましょうってね、支援の人がついて、それは到底無理なんですね。だけれど、ピューッと出て行ったときに、いつもだったら最後まで教室に戻らないけど、8時半、30分経ったら一回戻りましょう。一回戻ったら1分座ったら、あるいは5分座ったらまた出ましょう、そういうように少しずつ集中していくとか。学習においてそこまで多動を発揮してない人でも、学習においてそういうことを使っていくということです。時間の管理、感情の個性もそういうことになります。これはさっきの復習です。ワーキングメモリー理論に基づいた学習支援方略ということで、情報の整理、情報の最適化、記憶のサポート、情報のコントロール。

こんなものを作ってみたのですが。仮にこ

ここに大きい丸や小さい丸が点在してます。ここに丸がいくつか並んでいます。ここに星っていうか字が書いてあります。ここに砂時計と4つ丸があります。このワーキングメモリーのここにこれを、大きい丸と小さい丸はそれぞれいくらですか、この丸は合計いくつですか。1分に2つずつ、3分の砂時計に、3分に2個ずつ入れたら何分かかりますか。なんて読みますかと言われたときに、このボトルにどう入れていくかですね。そのときにちょっと工夫をして、この大きい丸は大きい丸で集めてあげる、小さいのは小さいので集めてあげる。大きいのが2つ小さいのが2つ。2個ずつだったらこの人は数えやすいので、2個の固まりを作ってみると6つあります。星っていう漢字も星っていうマークだったり平仮名のほしだったりっていう情報を補ってあげて、この星というときも覚えやすく理解しやすくしていきます。そうして3分砂時計2個だから、砂時計2個入れたら砂時計がもう一つ必要になって2個ですねっていうような、こういうような学習上の工夫をしてあげることによって、ワーキングメモリーは同じであっても、入っていきやすくなるわけですね。同じ情報であっても、ここに入っていきやすくなるわけですね。そうすると学習に効果があがっていくということになります。

具体的にそういういろんなしていくことになるんです。情報の整理、記憶のサポート、注意のコントロールというのを、今やってきたわけです。この4つに分類することができますということです。

ちょっといただいた時間で、自閉とかまでは難しいかもしれませんが。

ここまで話をできて、あらためて発達障害ってそもそも何だろうというところで、もう一度ちょっと考えていきたいなと思います。あらためて発達障害とは何だろうな。遺伝的背景、生得的な要因がどちらも、あるいはどちらか関連して、発達初期（幼少期）か

ら特徴が見られます。それから幼少期に診断することは可能だが、されていないことも多い。そのまま社会適応することもあれば、しないこともある。発達障害を持っているからといって社会適応できませんとか、そういうことではありません。することもあればしないこともある。これは当然ですね。

そして、しない場合、成人以降に受診し、遡って診断されることもあります。今非常に多くなってるんですけど、成人後の方が、大人の方が、私はどうもこれこれではないだろうか、特にアスペルガーではないだろうか、あるいはADHDではないだろうかとか、場合によっては、大人になって学習障害がわかりましたという。その方は大学も理系を出て、日常生活に大きな差し障りはなかったんですけど、会社に勤めたら、自分が電話を聞いて、聞いたときにメモしておいてくださいと言われてたら、電話で音で聞いたことが文字になってメモができないんですね。それで会社も辞めることになって、はじめてもしかしたらというので、そういうところがわかったというような方もいらっしゃると思います。一番多いのは心理的な課題、あるいは精神科を受診されて、生きづらさですね。苦しいと。勤めても、人との関係がとれない。でも、この辛さがあってもやっぱりつながりたいんですね。だけれど、本人はつながれないということを経験していきながら、私はそんな周囲とは関係は持ちません、あるいは周りみんなおかしいですということで、自分の中で防御していくとかね、いろんな状況があるんですけど、そういうご相談に来られて。突き詰めていくと、そういう状況がずっと続くと死にたい、死にたいという気持ちが起こってきて、それで相談に来られるとかいう場合も結構あります。あらためてっていうのは、幼少期のところからわかってっていうタイプもあれば、大人になってからそういう遡ってっていう場合もあります。余談ですけ

ど、DSM5では、今まで幼少期のとこまでの基準で、生育歴のところで判断していたのが、12歳とか年齢を高めたりとかいろんなことにもつながっています。こういうことで特徴、程度に個人差が大きくて、他の種々の精神疾患を合併してくる可能性が高い。でもいろいろな不適応状態が長く続いて、そしてその混乱が固まっていくうちに、そういう具合になっていくということがあります。

私たち臨床では、初期診断とか、診断っていうのは医学のほうですけど、私たちの場合はアセスメントということにつながっていきますね。そして特性診断、固まっていく場合があります。社会的な動き、ステージによる違い、いろいろあるわけですね。

これは専門的に勉強した方、DSM5という一番新しい最新のアメリカの分類ではこういうふうになってという、これも簡単な紹介だけなのでとぼしていきます。何がいくつ以上みたされるっていうチェック方式ですね。そういうふうになっています。検査もいろんな検査があります。だから知能発達検査だけでもいろいろありますね。大きくまとめるとLD学習障害というグループ、それから自閉症スペクトラムというグループ、社会性、コミュニケーション障害、こだわり、こういうところですね。それからADHD、注意欠陥性多動性障害のグループ。で、運動障害と大きく分けたら。なんでこの丸が重なっていつてるかという、重なってお持ちの方っていうのが結構いらっしゃるわけですね。みんな別々に存在するんじゃなくて、重なってる場合も結構あります。学校現場で発達障害への理解で、具体的な支援を考えるうえで必要な情報は何でしょうかということで調査をしたわけですね。そうすると、知りたいの一番が子どもの特性で、多動、注意力、こだわりなどの問題。二番目が学力や学習の状況。三番目が生育歴。四番目が家庭環境。五番目クラス集団の様子。六番目保護者の願い、七

番目知能指数。以下ですね。こういう具合に、何が必要かっていうニーズのところです。

この図はまた後で見てもらいますが、自閉症スペクトラム像っていうのが、ここにほんとは点数を入れてグラフを作りたかったんですが、ちょっとできてなくて申し訳ないんですけど、例えば学校現場であつたら、睡眠のリズムとかこのへんのところはあまり点数つかないんですが、家だとこのニーズが高くて、睡眠障害とか不眠で困ってらっしゃるお母さんいっぱいいらっしゃるのですね。子どもさんの睡眠が実際狂ってたり、取れなかったりということになってきます。それが衝動性、多動性、不注意のとかやったり集団不適応のとかやったりということ、そういうところ、何が本質かっていうことですね。こういういろいろなコミュニケーション、集団不適応、共感性、こだわり、感覚発達、協調、睡眠、学習、言語、いろいろなことがあります。

これ平成14年の文科省調査で、皆さんがいろんなところで何度もきかれる、6.3パーセント発達障害もった子どもさんがいらっしゃる。じつは24年、このときほど大規模調査でないんですが、調査の結果が出まして、これが6.5パーセントになってたと思います。10年後の調査ではポイントが上がっています。6.5パーセントになってたと思います。また、いろんな法律ができたり、いろんなことが変わってきました。特に平成16年発達障害者支援法、これによっていろんなことが変わりました。関係の方々、いろいろ良い面悪い面、非常に不自由になった面もありますね。ほんとお母さん、そういう人から見ると予約しても受診までが長かったり、そういうことがあつたり、そして今度、診断いただいても現場で非常に長かったり、あるいはどうしたらいいのかわからなかったりと、このところを、私たちはつないでいこうということをやっているということになります。

先程のところ、やっぱり担当時間の問題、個人さんの対応、まだいろんなことがあります。当然ですけど、専門分野において理解の仕方が違うと、そういうことも実際にはあります。そういう特性とかですね、そういうことに今、だから個別に診断だけでくくってしまうんじゃなくて、さっき言ったように同じ診断をもっておられてもニーズによって違ってくるわけですからね、そこをまっぴらにいきましょうということですよ。

それで二次的な問題として不眠、神経症、うつ、妄想、育児不安、少子化、いじめ、ひきこもり、就労といったいろんな問題。今日は話してできませんでしたが、ありますね。発達診断っていう微妙なところの診断がつくつかないとか、私たち一喜一憂したりするんですけど、そこだけじゃなくて、特性というものをとらえて二次的な問題を予防していくということですね。そして自分を知る、周囲が知る、その理解の差を縮める、それで自分にあった環境を作るということですよ。これをどうやっていくかということですよ。

それで精神面を維持していく。これをライフステージごとにみていくと、乳幼児期、育てにくいと思われがちで愛着形成が難しい場合がある。やっぱりこのタイプの子どもさんで非常に育てにくい、いろんなことがやりにくいので、お母さんとの愛着形成がとてもむずかしくなる場合があるんですね。なので、さっきも言いましたように、お母さんの育て方が悪いので何かが起こってきてるんじゃないという、ここだけは大切なことです。子どもさんの特性があって、そういうものが形成しにくいという場合があって、基本的な診断と。愛着形成っていうのは、人の信頼感ですよ。もう絶対安心ってことです。そのところの問題があったりおこってきたりします。それで学童期、怒られやすく問題ばかり、自己評価が低下します。青年期になって、今度はいじめや孤立が起こります。被害

感、不信感、不安感が起こります。成人期になったら、今度は就職が続きにくく、何度もそういうことをくりかえしている間に、抑うつ的になったり、自己否定的になったり、自分はなんでこんなにいじめられたり、疎外されたりするのか、怒られるのかとかいうことが自分でも見定められなくなってきて、…病気になるっていうことがあります。これが、自閉症スペクトラムと統合失調症とを、はじめは自閉症スペクトラム、アスペルガーという診断でしたが、統合失調症でしたとかにつながったりするのです。大切なことは、どちらの可能性も考えられるときは、どちらであっても大丈夫なように対応していくということですね。そして、診断かどうかということは、その先にある問題ですね。もしいろんな症状とか、状態とかでお困りの方いらっしゃったら、またゆっくりご相談していただきたいですが、今日はここまでのお話とさせていただきます。

最後です。とにかく、乳幼児期は子どもを理解して、学童期は注意の仕方にも配慮して、これはあくまで子育てのなかで、青年期はいじめから守ってあげる。被害念慮が固定する前に早期介入、これはほんとに大切に、発達だけの問題にかかわりません。私たちたくさんの方のご相談を受けていると、いじめがあったかどうかいうことは非常に大事なんだけど、いじめがあったときに誰かが親身になってとことんそのときに自分を守ってくれる人がいたかどうか、わかってくれる人がいたかどうか、そういうことが非常に大きく、その人の適応にもすごく関係してきます。何度もそういうことが起こると、被害念慮が固定してしまいますと、現実には遭遇したときには全て自分がそれにとらわれますから、そこで何か対処していくっていうことがもうできなくなるわけです。なので、早期のところ、いじめの対処というのがほんとに大切なあと、学校現場の先生方をお願いし

ています。

二次障害ということで、今言いました良い経験を積んで必ずいくということが非常に大切で、言葉はあまり適切でないんだけど、お母さん達にいろんな説明するときに、どういう説明をするとわかってもらえやすいかなという話をしてるときにその説明で、「あっそういうことですね」とおっしゃった方もいらっしゃるのですが、内容は違いますが「良貨は悪貨を駆逐する」ということがありますね。良い経験を積んでいくということは、いろんな困難とかがあったとしても、よい経験を積んでいくことでそちらの方が、子どもさん、強くなって、そのことがその子に自信を与えるようになるんですよって話をするところがあるんです。苦手やったり失敗やったり、いろんなことが繰り返されても、よい経験を続けていくことですね。

時計を見ましたら時間がきているので、ちょっとびっくりしてしまいました。すみません。

次に、一つずつ、なんでも、長所を活かしていく。自主性にまかしましょうとか、これではだめなんです。最終的には自己決定、あるいは自己達成感なんですけど、一つ一つはきちんとこっちが教えてあげるということです。それと、レジリエンスという言葉が最近よく使われますが、抵抗力っていうとおかしいですが、自己成長力と置き換えたらわかりやすいかなと思ったりするんですけど、今言いましたことですね。要するに、良い経験を積んでいくことによって自尊感情とか、褒められてそういうものができてきて、レジリエンスがよ強くなってくる。でも悪い経験をずっと続けていくと、これが行為障害とか反抗性障害というものにもつながっていきます。

もうこれ私時間がきてしまったので、もし今日お話しができてなかった場合に、2月14日に講演しに参りますので。すみません、ぎりぎりになってしまいました。ちょっとマイ

クの調子が悪くて音が何度も途切れたりしてとても聞き苦しかったり、ご迷惑かけて申し訳ございませんでした。